

はじめに

僕がこれから書こうとする話の主人公は、栃木県栃木市で建設請負会社を経営する廣瀬伸恵ひろせのぶえという女性だ。会社の名前は榊大伸だにしんワークサポートという。

といっても、大半の人は聞いたことがないだろう。建築や解体の現場仕事を請け負う会社はごまんとある。規模も社員三〇〇四〇名と小さい。

廣瀬と初めて会ったのは三年ほど前、雑誌の連載コラムを書くための取材だった。僕は二〇〇〇年代初頭から裁判所に通って傍聴ほうしん記をたくさん書いてきたが、そうするうちに有罪判決を下された被告人が刑務所を出てからどうしているかということに興味が出てきた。

一度ならず二度、三度と事件を起こして捕まる被告人が多いのだ。再犯率が高いのである。しかも、「出所しても仕事や住むところがないので罪を犯してしまった」と話す被告人が結構いる。刑務所に再入所する人の七〇・九%が再犯時に無職なのだ（法務省発行の『平成三二年・令和元年 矯正統計年報』きょうせい）。

裁判の目的は罪を犯した人に罰を与えることだと思われがちだが、本来はそうではなく、刑務所で更生後、再出発させることにある。にもかかわらず出所者たちが社会復帰しづらいのは更生システムがうまく機能していないということで、その現状を知るために取材を始めた。対象は服役を終えて出てきた人（出所者）をサポートする民間団体や個人。とくに働き口となる企業の代表に話を聞きたい。

ハローワークに募集を出し、犯罪歴のある人（非行少年を含む）を雇用して再出発を助ける民間の事業主は協力雇用主と呼ばれ、法務省ではそうした企業に助成金を出すなどしてバックアップ体制を作っている。でも、登録数が約二万四〇〇〇社あるのに、実際に雇用を行う企業は約一四〇〇社程度と少ない（法務省発行の令和四年（二〇二二年）版「協力雇用主に対する支援制度パンフレット」より）。その中の一社が廣瀬の会社で、取材対象者に選んだ理由は、先に取材した人の推薦だった。

わずか二ページの連載コラムなので、挨拶などを除くと正味一時間程度の取材だったが、終わるころには脳が痺れたようになっていた。出所者を雇う理由やその方法、受け入れ態勢、巻き起こるトラブルと解決法など話題は多岐にわたったが、そのせいではない。説明のためにちよくちよく差し挟まれるワードがやたらと強烈なのである。

暴走族、覚せい剤、逮捕、女子刑務所、獄中出産……。気になって仕方がないが、メインテーマは出所者についてだから詳細までは聞けない。聞いたとしても書ききれないのは目に見えていた。

それ以前に、僕はビビったのである。目の前にいる四十代になったばかりの女性社長の口から、昨日の夕食に何を食べたかを話すような軽さで犯罪臭たっぷりの単語が頻出することに。そんな人にかつて会ったことがない。

いったいどこまで本当の話なのか。「昔は悪かったんで」とニコニコ笑っている廣瀬には、なんともいえない風格、大物感が漂っているが、同時に明るくて冗談の通じそうな人でもある。僕がビビっているのを見透かして、わざと話を盛ったのではないだろうか。帰り際に「まさか信じてないですよ」と言いかねない雰囲気がある。

そんなこともなく帰途につき、無難にコラムをまとめたが、録音データを聴き込んでも廣瀬がやつ

てきたこと、やろうとしていることの全貌をつかめた気がしない。そのことが喉につかえた魚の小骨のように僕の中に残った。彼女自身が刑務所に入った経験が、出所者の雇い入れにつながっているらしいことはわかるけど、どうしてそんなことができたのか、そこに至るまでの経緯を聞き逃しているために不明なままなのだ。大失敗である。

だからだろう、連載を終えて次は何をやるうかと考えたとき、すぐに彼女の顔が浮かんできた。家の事情で、それまで住んでいた長野県から埼玉県に引っ越すことになったのも、彼女に呼ばれているのだと考えた。取材を申し込んだのは、コロナ禍が始まった二〇二〇年春のことだ。

ひさしぶりに連絡し、生まれたときからの話を聞きたいと言うと、即座に「いいですよ」と返事が来た。あっさりOKだ。僕に人生を語っても何のメリットもなく、ヤバい過去を書かれることにもなる。取材を申し込んでおきながら妙なことだが「本当にいいんですか」と確かめた。

「私、隠し事はしないと決めてるんで構いません。身内や友人、社員については名前を出さないでと頼みたい人もいるけど、それ以外は書きちゃってください。ほかの取材でも喋ってますよ」

廣瀬の波乱に満ちた人生に興味を持つテレビや新聞が増えてきたのだという。会社の経営で多忙なところへ僕の取材まで重なれば迷惑になりかねないが、引き受けることにしたのは廣瀬なりの理由があった。

「刑務所に服役していたとき、北尾さんの本を読んでゲラゲラ笑っていたんです。（刑務所の）中で笑いは貴重ですから。その人が私に興味を持つのだとしたら協力します。本になって受刑者に読まれたら最高ですね」

このときほど裁判傍聴記を書いて良かったと思ったことはない。

正式な申し込みをするため会いに行く。僕の家から車で高速道路を使って一時間半の距離だった。これなら十分に日帰り可能だ。廣瀬には小学生の娘がいるので、取材は昼間、自宅で行うことも決定。気が済むまで通っていいと言われ、ますますやる気がみなぎった。

せつせと通う以外に必要なものはないだろうか。ある。特殊な体験談であればあるほど写真が必要ではないか。さらに欲を言えば、感想をぶつけ合える相棒もいるといい。傍聴席で聞いているだけとはいえ、僕は犯罪者に慣れていて、それが不安だったからだ。コラムの取材時、僕は断続的に降り注ぐ聞きなれないワードに不意打ちを食らった。一步踏み込んだら引き込まれて抜け出せなくなりそう。な予感かしてブレーキをかけた。あのときの、なんとも言えない気分を忘れたくない。修羅場を潜り抜けてきたであろう廣瀬のパワーには、こちらも偏見や違和感を隠さず、ごく普通の常識ってやつで対抗するのが一番である。

これるときだけでいいからと、詳しい説明もせずに強引に誘ったのは、三十年来の友人であるカメラマンの中川カンゴロー。「それならいいよ」と返事をもらったら相棒になったも同然だ。僕たちとはともに六十代の初老オヤジで、不良だったこともなければ誰かと殴り合ったこともなく、犯罪とは無縁に暮らしてきた。廣瀬が暴れまくっていたであろう一九九〇年代は、若者の流行についていけなくなっていた時期。シワは寄っているけど、まったくの手探りで彼女の話が聞けるという意味では逆にフレッシュなのだ。

廣瀬に紹介するためふたりで栃木へ向かった日、さっそくカンゴローが「世間の目」を発揮してくれた。会社の前から廣瀬に電話して自宅まで先導してくれるクルマを待っているとき、社用車で現れた社員を見てささやいた。

「見た？ あの人、前歯が二、三本ないよ。なんか急に不安になってきたけど、それって社用車を運

転するのは身なりのきちんとした人だという決めつけがオレにあるせいかな」

こんなふうが始まった取材は月に一度か二度のペースで一年間続いた。それは前歯の欠けた社員と気軽に話ができるようになり、LINEを交換し、「いつかじっくり話を聞かせてよ」「いいっすよ」と約束したのに、社内でもめ事を起こしてどこかへ消えてしまうくらいの期間である。かと思えば、失踪した社員が出戻ってきて、また失踪して事件を起こし、裁判沙汰となるまでの期間でもある。

廣瀬の記憶を手繰り寄せながら話を聞き、三人がかりでひとりの人生を浮き彫りにしていく作業をしていると、彼女が通り過ぎるところにいつも流れていたヒリヒリした空気の匂いが蘇^{よみがえ}ってくる気がした。

では、そろそろ話を始めよう。レディース暴走族『魔羅啞^{マリヤ}』の初代総長・明美^{あけみ}が、不良息子たちを救う母ちゃん『マリア』になつていく激しくも逞^{たくま}しい物語。ジェットコースターに乗ったつもりで、振り落とされないようについでついでほしい。

「著者からのお断り」

本書では、第一章の途中から廣瀬伸恵の通称である「明美」という呼び名が使われています。十代の半ばから「明美」と呼ばれ続け、家族や役所関係など、ごく一部の人を除き、現在も、社員ですら「明美さん」と呼ぶほど定着した通称で、本名で呼ばれると本人が戸惑うほど。そのため、本文中では「廣瀬」と「明美」を併用しました。

人名について、取材対象者にはそれぞれ事情があり、本名を出しても構わないという人もいれば、できればそれは避けたいという人、いまでは連絡がつかない人もいました。そのため、登場人物の一部は仮名やニックネームでの表記となっています。

目次

はじめに

第1章 悪の道

- 1 ひとりぼっち
- 2 ヤンキー入門
- 3 源氏名は明美
- 4 レディース暴走族『魔羅啞』の誕生
- 5 覚せい剤の売人になる
- 6 緊急招集！『魔羅啞』同窓会

第2章 女子刑務所は修羅の花園

1 売人「明美」の逮捕

2 初めての刑務所暮らし

3 泣く、叫ぶ、吠える 発狂寸前の懲罰房

4 逃亡生活で指名手配

5 獄中出産

第3章 おまえの母ちゃんになってやる

1 悪い噂

2 イチかバチか

3 仲間から家族へ

4 運命の出会い

5 原田健一氏インタビュー

6 俺の仕事は母ちゃんを守ること

6 負けるもんか

第4章 私は決して見捨てない

- 1 出所者を迎える
- 2 『Chance!!』到来
- 3 三宅晶子氏インタビュー
廣瀬さんは泣きながら電話をかけてきます
- 4 私の日常は非日常
- 5 面会ツアー
- 6 “夢”に向かって走れ

おわりに

主要参考文献

悪の道

第1章



1 ひとりばっち

実家の庭で祭りを開催

廣瀬伸恵が生まれたのは一九七八年八月二十四日。新東京国際空港（成田国際空港）が開港し、日中平和友好条約が調印された年だ。若者の間ではディスコブームが起き、原宿では竹の子族が注目を浴びていた。人気絶頂だったアイドルグループのキャンディーズが、「普通の女の子に戻りたい」という名言を残して解散した年でもある。

出生地は現在も暮らす栃木市内。両親と三歳違いの姉の四人家族。父は多いときには七、八人の従業員を使う鉄工所を営んでいた。母は事務を手伝うこともあったが、基本的には専業主婦で家にいる。会社の工場とは別に、自宅の敷地が六百坪あったという。

「父は朝早く出かけて夜遅く家に帰ってくる典型的な仕事人間。私が生まれたときにはすでに亡くなっていた父方の祖父が、とても貧乏で苦労したと聞きました。父はそれが悔しくて、まじめに働いて会社を起こしたみたいです。だから私は何不自由なく、姉ちゃんのお下がりを着せられることもなく育ててもらっていたんです」

人もうらやむお嬢さんとして人生をスタートさせたのだ。

「そうなんですよね、すごい金持ち。その後の荒れっぶりから悲惨な幼少期を送ったんじゃないかと

思われたりするんですけど、まったく違うんでガツカリされたりする。いったい何を期待してるんだって話なんだけど、あはは」

父が地元で貢献したかったのか、あるいは金持ちアピールだったのか、自宅の庭を使って夏祭りを主催するのが恒例となっていたそうだと。

「やぐらを組んで、お囃子^{はやし}の人を呼び、露店まで組んで地元の人を招待する。全部無料で奉仕。そんな派手なこともしていたので、『うちって裕福なんだな』とは思ってました。あの、こんな話でいいんですか？」

廣瀬は自分の幼少期に僕やカンゴローの興味を惹く出来事はないと思っているらしく、先を急ぎたそうだった。今日に始まったことではない。雑談をしてもそういう気配が感じられるのだ。記憶をほじくり返されたくないというより、幼少期に関心が薄いのだろう。

彼女にとって、人生が本格的にスタートするのは自分の意思で行動し始めた中学時代以降。その時代に話が及ぶと一気に饒舌^{じょうぜつ}になる。そのため、金持ちのお嬢さんが中学生になった途端、手のつけられない不良に変身したような印象を受けてしまう。が、急に人が変わった理由を尋ねても、廣瀬の答えはあいまいだ。

「悪いことが楽しかったのかな。勢いでなんとなく、そうなっちゃったんですよ」

そんなことがあるだろうか。軽犯罪ならわからないでもないが、彼女はその後、地元で名をとどろかせる伝説の不良になっていくのである。

大伸ワークサポート（以下、大伸）で働く出所者には、貧困や家庭内暴力など家庭環境に問題のあった人が多い。雇う立場になって、廣瀬はその根深さに気づいたという。だとすれば、彼女自身の幼少期にも何かあっておかしくない。そこをほったらかして先を急ぐと、すべての話がわからなくなっ

てしまいそうだ。

「オレもトロさんと同じ意見。ちょっと変わったやり方だけど、三人で廣瀬さんのルーツ探しをしましょうよ」

カンゴローの提案がおかしかったのか、廣瀬が手を叩いて笑った。

「それ、いいかも。どうして自分がこんな人生を歩むことになったのか、私も知れるものなら知りたいです」

父は仕事人間、母は宗教に熱中

心当たりは本当にはないのだろうか。

「うーん、悪くなったのは自分のせいだから……。直接的な原因があるとしたら両親の仲が悪くなったことかな」

平穏だった家庭の雰囲気が変わってきたのは小学五年生のときだったという。夫婦ゲンカが絶えなくなり、両親が在宅しているときはふたりの様子をうかがいながら過ごすようになった。

「大ゲンカするんですよ。お母さんが刃物を持ち出して『殺してやる』と叫ぶのを、やめて、やめて、と思いながら自分の部屋に逃げていたなあ。母のは単なる脅しで、実際に刺すとか警察沙汰にはなかったんだけど」

大騒動ではないか。両親の不仲で私の心は壊れましたと言われたら信じるレベルだ。

思い返すと、ケンカのもと母の浪費にあった。専業主婦なのに家事をしなくなり、カードを使って月に百万単位の買い物をするようになったのである。母は派手好きで、水商売系のキラキラした服や、当時流行していた鱈革や蛇革の小物を好み、飲み歩くのも好きだった。一九八〇年代後半はバブ

ルの絶頂に向かって日本中が浮かれていた時代。その気になれば大金を使うことなどたやすい。

父は酒好きでも、飲んで暴れるようなことはなかったが、「誰のおかげで生活できてるんだ」と嫌みのひとつくらいは言っただろうと廣瀬は思っている。

といって、一方的に母が悪いとも思っていない。家事も子どものことも任せきりで仕事ばかりしている父に対する不満や寂しさが母の根本にあり、酔ったときなどにそれが爆発したのだと推測する。こうして、廣瀬家から一家団欒だんらんの時間が消えてしまった。悲しかったが、どうすることもできなかった。

では、それ以前はどうして平穏だったのか。廣瀬には思い当たるフシがある。

「うち、創価学会やってたんですよ。母方の祖母が熱心だったみたいですが、その影響もあって父と母も熱心にやっていました」

これも初めて聞く情報である。両親が所属していた地区の青年部ではしょっちゅう会合などがあり、夫婦そろって出かけたりもしていたそうだ。廣瀬と姉も学会員になり、少年部に連れていかれたこともあったという。

目に見えないものはあまり信じたくない姉妹の意見が合い、信仰心が深まることはなかったけれど、両親は信仰を通じて価値観を共有できていたことになる。

ただ、それも長くは続かなかった。父が仕事のときは母だけ出かけてしまい、帰りが夜遅くなることで増えていく。夫婦のきずなを深めていたはずの信仰でも歩調を合わせることが難しくなっていたようだ。

父は夜遅くまで仕事、母は会合などで家にいないので夜はもっぱら留守番。だいたいテレビでドリフターズのコント番組やアニメ、歌番組を観て時間をつぶした。ほかには何をしていたかと尋ねて

も「うーん」と黙り込んでしまう。何かに熱中していた記憶がないのだ。

「とにかくつまらない毎日を送っていたとしか言えない。学校は好きだったのね。勉強は苦手だけど友だちもいたから。問題？ 起こしてないのよ。小学生時代はまじめで授業もちゃんと受けるタイプだった。でも家ではね……。めずらしく両親がいると思えばケンカでしょう。それが嫌だから、私も姉も親がいるときは自分の部屋にこもってる」

ケンカが収まると、仲直りに一杯やるのか、両親はどこかへ出かけてしまうので、親が不在のときのほうが落ち着いていた時間になっていった。留守番中、姉妹で遊ぶこともほぼなかったという。姉が小学生の間は退屈な夜を分かち合うように一緒にテレビを観たりもしたが、この年代の三歳差は大きい。姉はマイペースな性格で、干渉したりされたりするのを嫌うタイプ。中学に進学すると勉強好きで成績が良いこともあって、自室にこもって自分の世界を作るようになっていったのだ。そうすることですべて暗くなつていく家の雰囲気^{あわが}に抗うとともに、早くも卒業後の進路や将来のことを考えていたのではないかと廣瀬は想像している。

いったん仲直りしたように見えても、しばらくするとまたケンカになるのは、解決に向けた歩み寄りがなければならぬ。父の帰宅は遅いまま、母の浪費もぶり返す。どちらも悪いのは相手だと思つていたら、またケンカになるのは避けられない。

両親が家にいるときは常に緊張状態、いないときは退屈。小学校の五、六年時はこんなふうに過ぎていった。

「多感なときでしたから、母が包丁持つて父を追いかけるのを、信じられない光景というよりは、『ええ？』とドン引きしながら見ている子どもだった。『嫌だなこの家。ここにいたくない』と思つたし。でも寂しいんだよね、どうしても。私、両親をそれほど悪い親だとは思わないですよ。虐待な

んでされたことないもん。まあ、結局うちの親、別れてしまふんですけど」

これでひと区切りというように、廣瀬が息をつく。これが自分の原点というには無理があると言いたげな醒めた横顔だった。

バラバラな家族

僕とカンゴローは、それぞれの頭に浮かんだ疑問を、夜の東北自動車道を走る帰り道に話し合うことにしていた。思い違いやひとり合点がてんを防ぐには、オヤジ同士、ない知恵を絞るしかないではないか。さっき聞いたのは廣瀬の目から見た当時の状況で、親には親なりの言い分があるだろう。姉のクールな立ちふるまいも、姉のことをそう感じていただけの話。ただ、それらを差し引いても、僕には不思議に思えることがある。家族の一体感があまり感じられないというか、バラバラな印象を受けるのだ。

僕は待っていたのである。家族旅行はどこへ行ったとか、姉と一緒に泣きながら夫婦ゲンカを止めに入ったとか、家庭内の安定を図るべく家族会議が開かれたという話を。でも、とうとう最後まで聞くことはなかった。

「たしかにそれはある。我々だったらどうかと考えると、幼少期の話をするときには楽しい思い出やくだらない失敗談が中心になると思うんだけど、そこがスッポリ抜けてるよね。姉ちゃんと取っ組み合いをしてオヤツを奪い合ったとか、遊園地に行ったとか、そんなエピソードを聞きたかったよ」

きつとあったと思う。でも出てこない。だとすると、問題はあったかどうかじゃないのだ。あったとしても本人の心に残っていないのが、廣瀬家の暗部を象徴している気がしてきた。

「オレは最初、両親の不仲が非行に走るきっかけだったかなと思った。ここにいたくないと思ってい

たわけだしね。だけど一方で、人間ってそんなに単純なものかなとも思う。だって廣瀬さん、親のことをそんなに非難していないよね」

そうなのだ。それどころか、親のせいだと思われるのを避けるように、かばうようなことまで口にするのをカンゴローも聞いただろう？

「悪くなったのはすべて自分のせいだと言うよね。あの潔さは、本気でそう思っていないと出てこない」

そうなると、裕福な家庭で生まれて何不自由なく育ったまじめな女の子が、両親の不仲で心をこじらせてストレスをため、中学生になった途端、人が変わったように悪の道に染まっていくというストーリーは、あえて説明するならそうなる程度のことなのか。僕には淡々と語られる小学生時代の中に、その先につながるカギが潜んでいるように思えてならないのだが。

「廣瀬さんの忠となる部分を発見できるかどうかで我々の腕が試される、と」

悪いことをたくさんしてきた彼女が、いまでは人にほめられるようなことをしている。その急激な変化を見て人は驚くが、そこには、こんな一本の線が通っているのだと言ってみたい。

「廣瀬さん、夕食の準備は済んだかなあ」

我々が話を聞いている自宅のリビングを、廣瀬は社員にも開放している。そればかりではなく毎日食事を作って、希望者にふるまうのだ。大仲は建設現場の請負工事を行う会社。現場はいくつかに分かれるので、顔を合わせない社員も出てくる。そういう日が長くなると社員間のコミュニケーションが不足し、ひいてはそれが暴力沙汰などトラブルのもとになることもある。食事をふるまうのは、栄養を取らせるためもあるが、社員が親密度を増すために考え出された作戦でもある。食後も一杯やったりして遅くまでいると言っていた。

「家に男を入れて平気なのかな。オレが女なら怖いよ」

そんなそぶりは微塵みじんも感じられない。「私はみんなの母ちゃん」だとよく言う。

「言うよね廣瀬さん。お子さんもいるから母ちゃんには違うない」

僕はその前に、自宅に毎晩わさわさ他人がいるだけで疲れる。

「まあ、まだ何もわかってないに等しい我々としては、サービスエリアで蕎麦でも食べて、もう少し話すしかないね」

いくら話したところでどうにもならないと知りつつ話さずにいられないのは、会うたびに廣瀬への関心が高まっている証拠でもある。だからこそ、根本となるものがどこかにあるなら探しあてたいのだ。

寂しさがトラウマ

その答えらしきものが見つかったのは数カ月後のことだった。いつものように自宅を訪ね、社員に食事をふるまう理由などを尋ねていると、「おいしいご飯を食べて笑顔になつてもらいたいから」と答えたあとで思い出したように語りだしたのだ。

「父はワーカホリック、母は信仰に夢中かつ遊び惚ほうけ、姉は超マイペースだったでしょ。幼い頃にそういうことがなかったから、家族で食卓を囲むことに幸せを感じるんですね。家に帰っても誰もいないことが多かったの、ひとりぼっちが寂しかった。中学生になって自宅が遊び仲間のたまり場になったときも、集まってワイワイやるのがとにかく楽しかった。つまり、私の原点は、寂しかったってことだと思う。ひとりであることの寂しさがトラウマ。だって、普通はリビングを社員に開放して一緒に食事する生活、嫌だもんね」

嫌というか、できない。

「ははは、そうだよ。でも私はやる」

それにしても、廣瀬の行動を解き明かすためのキーワードはシンプルなものだった。

「一番ギョツしてもらいたかったときに、それをしてもらえなかったことが根っこにあるのかな。極度の寂しがり屋になってしまったの。北尾さん、寂しいときとかない？」

ないとは言わないが、そこまで根は深くない。平凡な家庭で育ったけれど、愛情を受けるべきときにしつかり与えてもらったほうだと思う。

「いいなあ。私は寂しいのがこの世で一番怖いんだよ」

僕は彼女を打ちのめすような出来事があったにちがいないと考えてきたが、そうではなく、彼女は徐々に広がってしまった心の空洞を一刻も早く埋めたかったのである。寂しさというトラウマを忘れさせてくれるものなら、なんでも飛びつきたかった。

そして、見つけたのだ。悪の道の入り口を。

2 ヤンキー入門

茶髪に憧れて

「それで結局、親が離婚したんですよ。姉ちゃんと私を置いて母が出ていっちゃった。家を建てたのは父だし、女手ひとつで育て上げる自信がないと言っていた気がする」

廣瀬家から一家団欒というものが完全に消え去ってしまった大事件。母に捨てられたとの思いを廣瀬は長く引きずり、一時は恨んだ。それなのに、時期については記憶がいまいだ。

「小学校の終わりだったかな。待って、中学に上がってすぐの頃だったかも。昔のことだからよくわからない」

そこ、忘れるところかなあ。ショックが大きかったために記憶に蓋ふたをしてきたのかもしれない。しかし、インタビューを続けていくためには、思い出したいからと放置するのはまずい。ここは第三者である僕たちの出番。当時の様子をいろいろ尋ねて、中学生になっていたと判明した。

中学生生活の始まりはどんなふうだったのだろう。

「母がいなくなる直前あたりかな、ヤンキーに目覚めたんですよ。最初は外見からですね」

そうか、まじめな小学生で、姉も勉強好きなら、形から入るのが自然だ。

「小学校の終わりあたりから兆候はあって、行ってる学校の先輩が中学生になって髪を金髪に染めて

いるのを見てカッコいいと思ってました。私も中学に上がったら髪を染めてみたいと思った」

ヤンキーは、一九七〇年代から八〇年代にかけて関西を中心に使われだした、不良少年の総称で、八〇年代半ばには全国で一般的になった。廣瀬が中学生になった一九九一年、東京などの都市部ではストリートファッションに身を包んだチーマーが主流となっていたが、『BE-BOP-HIGH SCHOOL』などの人気漫画やカスタムバイクの専門誌などの影響もあって、地方ではまだまだヤンキーが健在だった。

いつの時代にも不良はいる。僕が高校生だった一九七〇年代の関東ではツッパリとか暴走族という呼び方をしていた。男子は長ラン（丈の長い学生服）にボンタン（幅広のパンツ）、靴はこれ以上ないほどぺったんこ。髪はリーゼントで、集団でバイクを乗りまわす。

「私の頃も暴走族やってるのは多かったから、表面的にはそれほど変わってないですね。北尾さんもやってた？」

いや、僕は高校時代、バイクの免許も持たない地味な生徒で、街でカットアゲされる側。繁華街に出かけるときは、いつも緊張していた。ただ、校内でツッパリグループが対立するようなことはなかった。学校ではのんびりしていた。

すると廣瀬は、そこが違う、進学した中学では学校そのものが荒れていたという。

当時、栃木市の公立中・高校では暴力事件が多発。窓ガラスを生徒が割って暴れ、新聞記事になるほど荒れていたのだ。

「私にはヤンキーの知り合いなんかいないわけです。バイクも興味ない。じゃあ何に惹かれたかという、見た目のカッコよさもあるんですけど、楽しそうだったから。夜まで仲間と遊んでいるのがうらやましかった。暴れたいんじゃないくて、家がつまらない。だから、中学生になったら絶対に遊び仲

間を作ろうというのがありました」

流行に合わせ、入学前に短ラン（丈の短い上着）と長いスカートをあつらえた。需要があれば入手は簡単にできる。どこでオーダーすればいいという情報は小学生でも知っていた。主流派ではないが、短ランを着た新入生はそれほどめずらしくもない。

憧れの存在に近づくべくコンビニでも手に入るブリーチを買ってきて髪の色を抜いた。どうせなら、美容院でパーマもかけて悦に入る。彼女にしてみれば、ヤンキーっぽい外見は、仲間募集とか不良っぽいのに興味ありのサイン。ナメるんじゃないぞや、ケンカ上等のつもりではなかった。

その証拠に、廣瀬は入学早々、吹奏楽部に入部。クラリネットを担当することになった。クラス以外にも友だちを作ったかったのだ。部活に打ち込めば、家でポツンとしている時間が短くなって寂しい思いをしなくて済む……。

「たら・れば」の話をしても仕方がないが、そのまま部活を楽しめるような中学生生活だったら、廣瀬の人生は大きく変わっていたと思う。

ただ、時期が悪かった。先述したように、学校は荒れ放題。体罰禁止は建前。自己防衛のため竹刀を持つ教師もいて、何かあれば生徒を引っぱたくのが日常茶飯事だった。

校門の儀式

その影響はほどなく廣瀬にも及ぶ。ある日、授業を終えて帰ろうとすると校門で呼び止められたのだ。相手は一学年上の女子グループ。一〇人くらいいた。ヤンキーとの初接近だ。

彼女たちの目的は「検閲」だった。生意気だとか、将来自分たちを脅かしそうだと思う新入生に力

を誇示して、逆らわないようにするのである。

「髪を黒くしろとか、短ランやめろ、ノーマルのスカートをはいてこいと難癖なんくせをつけてくる。私の母は娘の小学校の卒業アルバムの撮影に蛍光ピンクのボディコンみたいな服を着させるほど派手好きだったから、私の趣味もそうなって、白のブラウスの下に色つきのタンクトップを着たり、蛍光色の入ったブラジャーを平気でつけていたの。そういうのはやめろと」

先生ではなく、ヤンキーが風紀委員を買って出る。自分たちは短ランも金髪も許されるけど下級生はダメだと、奇妙な理屈を振りかざして。

「自分たちより目立つ後輩は許せないって感じ。学校に行くと毎日張られていて、裏にある公園でシメられる」

ネチネチと因縁をついたり、取り囲んで小突くということだろうか。

「ぶっ飛ばされる。毎日血まみれで帰宅してた。十代後半に私が本格的に悪くなったとき、その人たちは私を見かけると逃げたもん。復讐ふしうされると思ったんでしょ」

グループで校門を見張ってれば生徒や教師も気づくはずなのに、下校時の儀式のように行われていたのはなぜか。誰も止めなかったからだ。なぜ止めないか。生徒は巻き込まれるのを恐れ、教師は学校内で暴れられるよりましだと目をつぶるからだ。

「だけど、血が出てるんだから担任は気づくよね」

じっと聞いていたカンゴローが、当然の疑問を口にする。

「新米教師だったから、廣瀬がどつかでケガでもしてきたんかと思ってたのかな。私も最初は言ったと思うけど、先生は当てにならないと思ってからはいい言わなくなった」

「すると、殴られるか、言うことを聞いておとなしくするかの二者択一だ」

「ぶっ飛ばされる。変えないから」

廣瀬は、目をつけられた新入生がつぎつぎに髪を黒く戻すのを見ていた。そうすれば検閲を受けることもなくなるのだ。小学校が同じだった友だちからは、あの先輩たちはヤバイから言うことを聞くほうがいいと忠告された。華奢な自分の腕力では太刀打ちできないこともわかっている。

でも、嫌だった。理不尽だと思った。

横暴が許されていたのには、校内ヤンキー勢力図が関係していた。通常なら三年生が力を持ち、二年生以下は最上級生の支配下に置かれるのだが、この中学では二年生の勢力が強く、三年生を封じていたのだ。校内のボスは二年生のトップ（男子の番長）だったのである。

多くの学校で男女のヤンキーは密接な関係にある。検閲していたのは二年生の女子たちで、彼女たちが横暴なふるまいができたのは学校を牛耳る男子グループがバックにいたからだ。新入生を支配すれば、卒業まで校内に敵なしとなる。

つまり、彼らに尻尾を振ることは、今後二年間、言いなりにしなければならないことを意味する。とてもじゃないが廣瀬には耐えられそうにない。

「この前まで金髪だった子が髪を黒くして、中二グループに『先輩、おはようございます』とか声をかけてる。どこで知恵をつけたんだろうって思うほど、上手に取り入る子もいました。現実的だし賢いんです。できることなら私もそうしたかった。でも、できないの。いまでもそうだけど媚こびを売るのがヘタなんですよ」

ぶっ飛ばされるために登校するような日が続く。漫画なら「おまえ根性あるな、認めてやるよ」となりそうなのだが、そうはいかない。毎日ボコボコ、アザだらけ。無抵抗でやられながら「コノヤロー、いつか見てろ」と胸のうちに叫ぶのが精いっぱいだ。

新しい友だちはできず、思い描いた中学生生活はたちまち遠ざかった、部活にも出なくなり、とうとうクラリネットが吹けるようにはなれなかった。

そんな廣瀬でも、つらくなつて、髪を黒く戻したことが二度あるという。服装もおとなしくする。そうすれば検閲はクリアできた。検閲の名目でやっていることだから、文句のつけようがないと手を出せないのだ。でも、かわいい後輩になれない自分は、要注意人物としてマークされている。少しでも隙を見せたら終わりだ。だったら好きにしたほうがいいと再び金髪短ランに戻す。

廣瀬は自分の性格を、負けず嫌いで気が強いと分析する。小学生時代はさほど目立たなかったその性格が、メキメキと顔を出していた。

「一緒に立ち向かおうとする同級生はいなかったですね。私は中二の途中で学校へ行かなくなったんだけど、それまでずっとぶたれてました」

ケンカとシンナーの日々

勉強が嫌いなこともあって、ときどき学校を休むようになった。最初は行ったことにしたくて誰もいない家にこもっていたが、それでは何も楽しくない。仲間を求める気持ちを抑えきれなくなった廣瀬は、救いを求めて表を出歩くようになっていく。他校に進学した小学校の友人のついで、学校をさぼって遊んでいる連中と知り合うことができた。

そのうち市内でもっとも荒れていた中学の女子ふたりと仲良くなり、毎日遊ぶようになった。たまり場はゲームセンターやイトーヨーカドー。

タバコはもう吸っていたが、中一からシンナーをやっているその子たちに教えてもらって自分でも吸いだした。ふたりと一緒にいるのが楽しくて、シンナーはいけないんじゃないかなんて考えもしな

かったという。

類は友を呼ぶの法則で、その他の不良とも親しくなる。彼らといれば退屈知らずで夜まで遊べた。遊びというのは廣瀬流の言いまわしで、ボウリングでもやるのかと思われそうだが全然違う。

「別グループの悪い子たちとケンカしたり、シメ会っていうんだけど、そのへんの金髪女を捕まえて殴ったりする。それまで殴られることはあっても殴ったことはほとんどなかったんだけど、あっさりできたんですよ。一度やったら二度目はラク。躊躇なくできるようになる」

あつという間の非行化である。でも、話はここからが本番だ。

栃木市は大きな街ではなく、外で暴れる不良の数も知れている。ニューフェイスとして登場した廣瀬たち女子グループの存在が噂になるのは時間の問題で、男子の中学生グループとの交流が始まったケンカ、シンナーに酒とセックスが加わったのだ。好奇心のなせる業か、セックスへのハードルも低く、すべて成り行きというか、シンナーでラリった勢いで行われていく。

誰とでもというのではなく、いちおう彼氏らしき相手はいる。でも、そこにあるのは恋愛感情というより、彼氏とエッチしている自分という満足感でしかない。そのため、飽きたり気に入らなくなればお互いすぐに相手を代えた。

いくらなんでも軽すぎやしませんか……。四半世紀も前の話を、僕とカンゴローは眉間にシワを寄せて聞いてしまう。

シンナーを吸うには場所が必要なので、いつしか廣瀬の家がたまり場になった。親はいないし冷蔵庫にはたんまり食料もある。仲間とわいわい騒ぐのは廣瀬にとっても望むところだ。疲れ果てて眠るまで誰かがそばにいてほしい。

そんな妹に、姉はまったく干渉してこなかった。乱痴気騒ぎに文句を言うでもなく、部屋にこもつ

て勉強している。私は私、妹は妹とでもいうような態度だった。のちにわかることだが、姉は姉で居心地の悪い実家を出る方法として、地元以外の大学に進学する目標を立てていたらしい。

学校では得られなかった仲間を作ることができた。退屈な時間も激減した。ヤバい遊びで毎日が刺激に満ちている。そんな廣瀬にもっといいことが起きた。

「廣瀬に紹介したい女がいるんだよ」

と、男友だちが連れてきた同年のスズ（仮名）と仲良くなったのだ。

「深刻な家庭の問題を抱えた子で、家に帰りたくないからしょっちゅう一緒にいるようになった。私にとって人生初の親友といえる存在ですね。いまでも仲良くしてます」

学校に見切りをつけ、悪い遊びも覚えたが、スズという得がたい友だちと出会うことができた。これで少しは落ち着くのかと思いきや、話はさらにエスカレートする。

生きのいいヤンキーたちに目をつけるのは誰か。プロの遊び人、ヤクザが接触してきたのだ。

人生上等！ 未来なら変えられる
北尾トロ・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定 価：1,980円（10%税込）
発売日：2023 年 2 月 3 日
I S B N：978-4-7976-7423-1

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)